

2025 年度 地域連携推進室 活動報告書

静岡大学 情報学部 地域連携推進室

2026 年 3 月 31 日

目次

1. 室長挨拶	3
2. 地域連携推進室の概要	4
地域連携推進室の目的・業務	4
2025 年度の構成員	4
3. 2025年度の情報学部における地域連携事業.....	5
探究・情報ミニ講座.....	5
高校生探究・情報コンテスト	7
情報学部公開講座 2025.....	8
アイデアソン&データソン2025.....	9
児童・生徒向けドローン講座	11
1. 浜松RAIN房（ものづくり理科地域支援ネットワーク）	11
2. 浜松科学館.....	11
3. 浜松聖星高校	11
4. 高台協働センター	12
学生ボランティア活動	14
1. 浜松市立雄踏小学校での活動.....	14
2. 浜松市立追分小学校 パソコンクラブ支援	15
3. 浜松市立追分小学校 6年生 理科授業補助（MESHを活用）	16
市民公開シンポジウム「情報が揺さぶるデジタル地域社会～私たちのまちで考える『本 当に信じられる情報』～」を開催	18
静岡のクイズ団体「SDQC」への参加および行動実験を通じた地域連携.....	20
舘山寺の魅力再発見プロジェクト	21
情報技術と英語体験学習 -高校生との研究室体験会報告-	22
地域密着型プログラミング講習会「レギオ」	23
浜松市民アカデミーでの講演	24
浜松市立江南中学校の生徒が情報学部を訪問	25
静岡県立川根高校魅力向上支援プロジェクト	27
ミュージアムDX推進の取組	28
地域在住高齢者の健康チェック会	29
「西浦の田楽」の記録映像アーカイブプロジェクト	31
特別支援の地域への拡張を目指すインクルーシブ・ナラティブAIプロジェクトの構想 （浜北特別支援学校）	32
4. 連携協定の締結.....	33

浜松医科大学との部局間包括協定の締結	33
静岡市・浜松医科大学との「医工情官・地域連携協定」の締結	34
浜松市・浜松医科大学との包括連携協定の締結	35
5. 情報学部地域連携科目	36
コミュニティ・デザイン論/演習	36
情報社会とコミュニティ/情報・コミュニティ演習	36
家族福祉政策論	36
フィールドリサーチ	36
博物館実習	36
情報学特別講義Ⅰ	37
メディア制作演習	37
6. 情報学部教員による地域志向科目（教養科目）	38
わが街・浜松の市政	38
地域社会と情報	38
社会と製造業	38
起業論	38

1. 室長挨拶

地域連携推進室長

今日の大学には、従来の研究や教育に加え、地域の拠点として様々な役割を果たすことが求められています。そうした中、静岡大学の取り組みに加え、情報学部として独自の立場から地域連携を進めるため、情報学部では平成18（2006）年に情報学部地域連携推進室を設立しました。これまで、静岡県西部地区を中心に、学校や自治体、企業の皆様と連携し、多様な取り組みを行ってまいりました。

現在は、少子高齢化や人口減少に加え、デジタル田園都市国家構想やDX（デジタルトランスフォーメーション）など「デジタル」を軸とした社会の変革が進められています。デジタルは、まさに情報学部が培ってきた知見を生かせる重要な分野であり、私たちが役割を発揮すべき領域でもあります。一方で、AIなどの技術については、その活用のあり方を丁寧に考えていく必要があります。

このように先行きが見通しにくい時代において、地域の調和ある発展に向け、「デジタル」の側面から少しでもお役に立てることが、私たち情報学部の使命であると考えています。

地域連携推進室は、地域に開かれた窓口として、皆様のご要望やご意見に丁寧に耳を傾けながら、できることを一つひとつ形にし、皆様とともに歩んでいきたいと考えています。どうぞお気軽にお声をお寄せください。今後とも、よろしくお願い申し上げます。

2. 地域連携推進室の概要

地域連携推進室の目的・業務

本室は、平成19年の「学校教育法」改正により大学の目的に新たな使命が付加されたことに伴い、同法 83 条 2 項の理念を「地域連携推進室は、情報学部および総合科学技術研究科情報学専攻の教育力、研究力をもとに地域連携を推進することにより、地域社会の発展に寄与することを目的とする」と本室の規程に明示的に盛り込んでいます。

この目的の遂行のために、本室では次のような業務を行っています。

- (1) 教員や学生が行う地域課題に取り組む活動の奨励と支援
- (2) 地域連携に関わる活動の情報収集、および教員・学生への情報提供
- (3) 教育研究成果を地域に還元するための公開講座等の企画と運営
- (4) 市民団体、事業者、地方公共団体等からの地域連携に関わる相談窓口
- (5) 全学の関連組織との相互連携
- (6) その他、地域連携に寄与する事項

2025 年度の構成員

2025 年度の地域連携推進室は、下記のメンバーによって構成されています。

室長	教授	永吉 実武（行動情報学科）
室員	准教授	高瀬 奈美（情報社会学科）
	講師	山本 頼弥（情報科学科）
	助教	後藤 謙太郎（行動情報学科）
室員（オブザーバ）	教授	白井 靖人（情報科学科）
事務補佐員		本村 恵

3. 2025年度の情報学部における地域連携事業

探究・情報ミニ講座

2025年8月6日（水）、静岡大学浜松キャンパス共通講義棟11にて、高校生を対象としたミニ講座「定量的調査の方法（アンケート）」が開催され、7校から34名の高校生が参加しました。本講座は、情報学部情報社会学科の藤岡伸明先生が講師を務めました。本ミニ講座は、2025年11月9日(日)にテクノフェスタで併催される高校生探究・情報コンテストに参加登録した高校生が、より探究に必要となる情報を取り扱うための知識に関して学びを深めるためのイベントとして実施しました。

当日は12時30分に開場し、13時から講座がスタート。冒頭では後藤謙太郎先生（地域連携推進室）より開会の挨拶がありました。その後、藤岡先生による3コマの講義が行われ、アンケート調査の設計から結果の分析、そして調査における倫理（ルールとマナー）について学びました。

講座では、Googleフォームを用いたアンケートの作成と配布、Googleスプレッドシートを使った基本的な集計・分析方法の実習も行われ、高校生たちは実際に手を動かしながら理解を深めていきました。

参加した高校生からは、以下のような感想が寄せられました：

- Google スプレッドシートの使い方が分かってとても参考になりました。
- 知らなかった操作方法を学べて良かったです。今後、積極的に使いたいと思います。
- Excel には慣れているが、Google スプレッドシートは使ったことがなかったので新鮮でした。
- プレゼン資料を作成する際のポイントを教えていただき、今後の参考になりました。

講座は16時頃に閉会の挨拶とともに終了し、参加者からは「楽しかった」「丁寧で分かりやすかった」といった前向きな声が多く聞かれました。今回の体験を通して、調査設計の基本や情報活用のスキルを実践的に学ぶ貴重な機会となりました。



藤岡伸明先生の講義の様子



参加した高校生たち

高校生探究・情報コンテスト

第3回高校生探究・情報コンテストは、テクノフェスタに合わせて11月9日（日）に浜松キャンパスで開催されました。静岡県内外から約150名の高校生や教員が集まりました。53件のポスター発表が行われ、高校生たちが探究の成果を熱心に披露しました。審査は大学教員、自治体DX担当者など29名が行い、厳正な評価のもと、最優秀賞1件、優秀賞2件、奨励賞5件、情報共創探究賞4件などが選出されました。表彰は情報学部地域連携推進室長が行い、受賞者たちに感謝と称賛の言葉が贈られました。

最優秀賞：量子コンピュータを用いた自動運転の研究

優秀賞：QGISを活用したヒグマ出没情報の可視化とゾーニング管理の設計-北海道札幌市を対象とした地理的・気象的要因分析に基づく都市計画の提案-

AIを用いた鶏の暑熱対策システムの開発

奨励賞：千葉県キャベツ産地の気象データを用いた小売価格の決定要因分析（ほか4件）



情報学部公開講座 2025

市民の皆さまに情報学部の研究内容や教育の魅力をより広く知っていただくことを目的に、本学部では毎年11月のテクノフェスタに合わせて公開講座を実施しています。今年度は11月8日（土）に対面形式で開催し、30名の方にご参加いただきました。

国を挙げて数理・AI・データサイエンス人材の育成が進むなか、2025年度より大学入学共通テストでも「情報」が本格導入されました。DXが一層求められる今日、高校教育と大学教育をどのように連携させ、次世代に必要な情報活用力を育てていくかが重要な課題となっています。

公開講座では、木谷友哉教授（専門：ITS・センサーネットワーク）による「物理（現実）世界と計算機世界の融合ーサイバーフィジカルシステムからデジタルツインへ」、西村崇宏准教授（専門：人間情報学・感性工学）による「統計的な推測による人間行動の理解と応用」、岡沢亮助教（専門：メディア・コミュニケーション）による「相互行為としてのコミュニケーションー情報の伝達・受容図式を超えて」の3題が行われました。情報科学・行動情報学・情報社会学の幅広い視点からミニ講義が行われました。その後のパネルディスカッションでは、情報教育の高大接続というテーマで、高校での基礎的な情報教育を大学での専門領域へどのように接続させるかについて活発な議論が交わされました。

「DXやAIの最新の話を知りやすくて良かった」「三学科の連携を知り安心した」といった感想が寄せられました。情報学部3学科が連携することで見えてくる教育と研究の広がりを、来場者とともに共有する有意義な機会となりました。



アイデアソン&データソン2025

■主催：静岡大学情報学部地域連携推進室

■共催：静岡県統計活用課、浜松市広聴広報課／デジタル・スマートシティ推進課

■コーディネータ：市川博之氏（一般社団法人シビックテック・ラボ代表）

■参加者：25名（所属：静岡大学情報学部、静岡大学大学院教育学研究科、浜松聖星高校、民間企業等）

■日程

・6月7日（土）アイデアソン

・6月21日（土）データソン

■概要

オープンデータを活用して社会課題の発見・分析・解決策立案をめざすアイデアソン・データソンを開催しました。アイデアソンとデータソンは、それぞれアイデア+マラソン、データ+マラソンという単語を合成した造語です。いずれも、参加者が短期間に集中して特定の課題に取り組み、成果を発表したり競い合ったりする点を特徴としています。アイデアソンでは指定されたテーマに関する優れたアイデアの創出を、データソンでは優れたデータおよびデータ活用法の創出に取り組むのが一般的です（参考：ハッカソンはハック+マラソンの造語であり、アプリやシステムのプロトタイプ開発を行います）。

(1) アイデアソン

「「防災×データ可視化」：オープンデータで地域防災力を強化しよう」というテーマでアイデアソンを開催しました。シビックテック・ラボ代表の市川博之氏のファシリテーションのもと、ビンゴゲームで防災知識を習得し（防災ビンゴ）、Tableau Publicを用いたデータ可視化手法を学びました。また、浜松市デジタル・スマートシティ推進課より、Tableau Publicを用いた浜松市のデータ・ダッシュボードをご紹介いただきました。その後、参加者は関心を共有する6つのチームに分かれ、チームごとに防災・災害に関わる地域課題を整理・分析し、各チームがデータソンで取り組む地域課題を決定しました。また、それぞれの地域課題に対する解決策のアイデア出し（ブレインストーミング）を行いました。

(2) データソン

アイデアソンに引き続き、6つのチームごとに地域課題の分析と解決策の実装に必要なオープンデータを検証し、Tableau Public等を用いてオープンデータを可視化する方法を検討しました。最後にチームごとに成果発表と質疑応答を行い、審査員（市川氏、静岡県職員、浜松市職員、本学教員）が審査しました。審査結果は以下の通りです。

■ 最優秀賞：「共助促進アプリケーション：UNITE」

災害発生後に避難所でしばしば発生する物資および人手の不足という課題を解決するために、各避難所が保有している支援物資と人材を量的に把握し、その過不足状況を可視化するアプリケーションの設計およびモックアップ制作。画像処理技術を用いて支援物資の分類・計量を高速化するというアイデアとそのモックアップ制作が高く評価されました。

■ 特別賞：「避難所生活体験型防災訓練」

浜松市内の各地域で宿泊型の避難生活を体験できる防災訓練を実施し、訓練中に実際に起きたトラブルや参加者から収集したフィードバックを量的・質的データとして蓄積・整理し、浜松市のウェブサイトで公開するというアイデアの提案。重要であるにもかかわらずほとんど行われていない宿泊型の防災訓練に注目した点と、防災訓練で得られたデータを公開するというアイデアが高く評価されました。

グループワークの様子



児童・生徒向けドローン講座

遊橋研究室・藤岡研究室ならびに先端情報学実習「ドローン・プラクティス」では、小学生から高校生までの児童・生徒を対象とするドローン講座を開催しています。2025年度は、浜松RAIN房（ものづくり理科地域支援ネットワーク）、浜松科学館、浜松聖星高校、高台協働センターと連携し、4つの講座を開催しました。

1. 浜松RAIN房（ものづくり理科地域支援ネットワーク）

浜松RAIN房に所属する小中学生14名を対象とするドローンプログラミング体験会を、8月7日に佐鳴会館で開催しました。参加者は約2時間の体験会の中で、ドローンの活用状況、法規制、飛行の仕組み、プログラミングによる飛行の基礎を学びました。プログラミング飛行の体験学習では教育用ミニドローン（Drone Star Party）と専用のビジュアルプログラミングソフトを利用し、順次・反復・分岐処理について楽しく学びました。講師は遊橋研究室の学生が務め、ドローン・プラクティスの受講生がアシスタントとして参加しました。

2. 浜松科学館

浜松科学館では、飛び入り参加型のドローンプログラミング体験会と講座型のドローンプログラミング体験会を開催しました。前者は8月21日と9月21日の10:00～12:00に浜松科学館2階のみらい～らルームで開催され、2日間で約40名の子どもたちがドローンをプログラミングで飛ばす体験を楽しみました。後者は9月28日の10:30～11:30と13:30～14:30に浜松科学館1階のサイエンスラボで開催され、午前の部は11名、午後の部は9名の子どもたちがドローンプログラミングをじっくり学びました。飛び入り参加型および講座型の両体験会において、教育用ミニドローン（Drone Star Party）と専用のビジュアルプログラミングソフトを利用し、順次・反復・分岐処理について学びました。講師は遊橋研究室の学生が務め、ドローン・プラクティスの受講生がアシスタントとして参加しました。

3. 浜松聖星高校

浜松聖星高校と静岡大学との高大連携授業・出前授業の一環として、「ドローンと災害」をテーマとする授業を2回に分けて実施しました。第1回授業は9月5日に、第2回授業は2月13日に、浜松聖星高校で実施しました。参加者は同校2年生の「情報Ⅱ」履修者11名です。授業は「情報Ⅱ」の授業時間（15:45～17:15）を用いて行われ、藤岡教員が講師を務め、ドローン・プラクティスの受講生がアシスタントとして参加しました。第1回授業では教育用ドローン（Tello）、専用ビジュアルプログラミングソフト、専用コントローラを利用し、第2回授業では教育用ドローン（Tello Edu）、Visual Studio Code、Pythonを利用しました。

第1回授業では、ドローンの活用状況と法規制について学んだ後、コントローラによるマニュアル操作とビジュアルプログラミングソフトによるプログラミング飛行の2種類の方法で、被災地における探索飛行をイメージした飛行実習を行いました。

第2回授業では、被災地における探索飛行をイメージした飛行実習の発展編として、ドローンをPythonで制御し、機体下部のセンサーでマーカーを探索しながら自律飛行させるという課題に取り組みました（写真参照）。



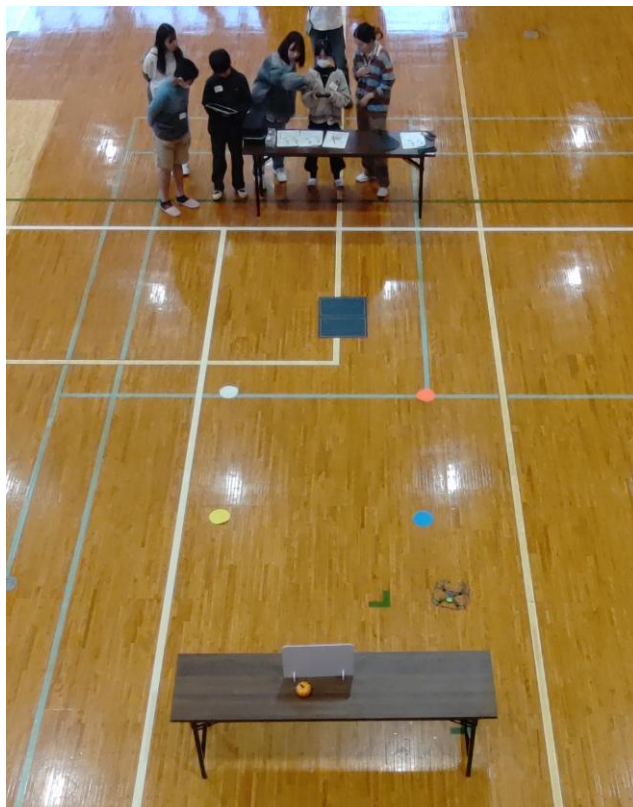
センサーでマーカーを探索しながら自律飛行させる様子（第2回授業）

4. 高台協働センター

[浜松市と大学との連携事業](#)の一環として、「ドローンと災害」をテーマとする小学生向けドローン講座を11月1日に高台協働センターの体育館で開催しました。12名の参加者は約2時間の講座の中で、ドローンの活用状況、法規制、プログラミングによる飛行、コントローラによるマニュアル操作の基礎を学びました。ドローンの飛行実習では教育用ミニドローン（Tello）と専用のビジュアルプログラミングソフトおよび専用コントローラを利用し、被災地における探索飛行をイメージした飛行実習を行いました。具体的には、机の上に目隠し用スクリーンを設置し、スクリーンの裏側に置かれた物をドローンのカメラで確認・撮影して元の場所に戻るといった課題に取り組みました（写真参照）。

この講座ではドローン・プラクティスの受講生が講師として参加者を直接指導し、藤岡教員が講座全体の取りまとめ役を担当しました。また、学生講師のリーダー3名は2月

26日に浜北文化センターで開催された浜松市地域連携事業成果報告会に出席し、ドローン講座の目的・内容・成果等について報告しました。



マニュアル操作による探索飛行の様子

以上の4つのドローン講座は対象、テーマ、難易度等は異なりますが、楽しみながら新しい情報技術を体験したり、新しい情報技術が社会でどのように活用されているか／活用しうるかを考えたりする機会を地域の児童・生徒たちに提供するという点では共通しています。本学部では、このような先進的な取り組みを通じて情報技術と社会の関係について考える機会を地域社会に提供しています。

学生ボランティア活動

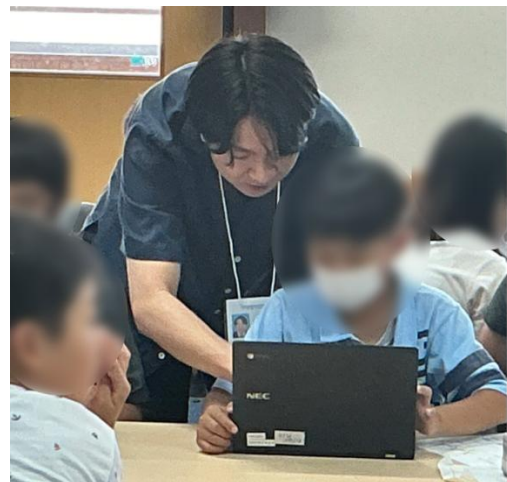
静岡大学情報学部では、プログラミングやICT活用の専門知識を活かし、地域の学校での教育支援を目的としたボランティア活動を実施しています。本活動は、各学校からの依頼を受け、学生が地域貢献を果たす機会としても位置づけられています。2025年度は、以下の学校での活動を行いました。

1. 浜松市立雄踏小学校での活動

活動概要

- 参加学生：静岡大学情報学部の学生 14 名
- 実施日：
 - 6月27日（金）
 - 7月4日（金）
 - 10月3日（金）
 - 10月17日（金）
- 活動内容：

本活動では、小学生を対象に、Scratch を活用した学習支援を実施いたしました。学生ボランティアが児童と協力しながら、デジタルツールの操作方法を丁寧に説明し、プログラミング学習のサポートを行いました。4回の活動を通して、簡単なゲーム制作に取り組みました。最後には完成した作品を全体で紹介する機会を設けました。児童は楽しみながら主体的に学習に取り組んでおり、発表の場面でも意欲的な様子が見られました。



試行錯誤を重ねながら、楽しそうにプログラミングに取り組む児童の様子

2. 浜松市立追分小学校 パソコンクラブ支援

活動概要

- 参加学生：静岡大学情報学部 of 学生 13 名
- パソコンクラブの児童：4～6 年生（約 20 名）
- 実施日：
 - 10 月 20 日（金）
 - 11 月 13 日（木）
 - 12 月 9 日（火）
 - 2 月 13 日（金）
- 活動内容：

本年度より新設されたパソコンクラブにおいて、学生ボランティアが児童とともにプログラミング学習に取り組みました。主にScratchを活用し、基礎的なプログラムの作成を支援いたしました。また、クラブ活動を通じて異学年の児童同士の交流を促し、ICTを活用した創造的な学習環境の構築を目指しました。

本活動では、プログラミング的思考の中核である「論理的思考力」「問題解決能力」「創造力」を育成することを目的とし、特に、毎回形が変化する「迷路の自動生成」というテーマに取り組むことで、複雑な事象を単純なルールの組み合わせとして捉えるアルゴリズム的思考を体験できるよう工夫いたしました。



学生ボランティアのサポートのもと、Scratch を使ったプログラミングに取り組む児童の様子

3. 浜松市立追分小学校 6年生 理科授業補助（MESHを活用）

活動概要

- 参加学生：静岡大学情報学部 of 学生 3 名
- 対象学年：6 年生
- 実施日：2 月 6 日（金）
- 時間：3 校時
- 場所：浜松市立追分小学校
- 活動内容：

本活動では、MESH（メッシュ）を活用した理科のプログラミング授業を実施いたしました。MESHは、IoT技術を活用した電子ブロック型のデバイスであり、児童が直感的にプログラミングを学ぶことができるツールです。

当日は、静岡大学情報学部の学生が授業の実施に加え、MESHの操作方法やプログラム作成の補助を行い、児童が自ら試行錯誤しながら学習を進められるよう支援いたしました。

授業では、児童がMESHを活用して実験に取り組み、デジタル技術を用いた課題解決の方法を体験しました。特に、センサーを用いたデータ収集や自動制御の仕組みについて学び、理科の知識とプログラミングを結びつける機会を提供することができました。

また、身の回りの困りごとについてグループで議論し、それぞれ課題を設定したうえで、MESHを用いてセンサーや音などをプログラミングしながら解決方法を検討し、発表を行いました。グループ内では活発なやり取りが見られ、児童は意欲的に活動に取り組んでいました。



説明風景



光に対するセンサーの反応を確認しながら学習している様子

市民公開シンポジウム「情報が揺さぶるデジタル地域社会～私たちのまちで考える『本当に信じられる情報』～」を開催

インターネット詐欺や誤情報など、情報技術の発展がもたらす負の側面が社会に深刻な影響を与えています。情報学部教員を中心に構成されるデジタルソーシャルトラスト研究所（代表：行動情報学科 森田純哉）は、こうした課題に対し「信頼」を軸にした新たなデジタル地域社会のあり方を探求しています。その活動の一環として、2025年5月31日（土）に、えんてつホールにおいて、市民公開シンポジウム「情報が揺さぶるデジタル地域社会～私たちのまちで考える『本当に信じられる情報』～」を開催しました。本シンポジウムは、静岡県警、静岡県、静岡県教育委員会の協賛・後援のもと実施され、100名を超える市民が参加しました。特に今回は「サイバー犯罪」をテーマに据え、地域の実情と学術的知見を統合し、安心・安全な未来に向けた議論を深めました。会場では、警察関係者、行政関係者、教育関係者、研究者、市民の間で活発な意見交換が行われ、デジタル時代における信頼とリテラシーの重要性を改めて共有する機会となりました。今後も大学として、地域と協働しながら継続的な対話と発信を進めてまいります。



静岡県警察 津田 隆好 本部長による招待講演（役職はイベント時のものです）



日本サイバー犯罪対策センター 櫻澤 健一 業務執行理事による招待講演



静岡県教育委員会 小野田 秀生 教育監、静岡県議会 良知俊一 議員、研究所参加教員によるパネルディスカッション

静岡のクイズ団体「SDQC」への参加および行動実験を通じた地域連携

情報学部行動情報学科の白砂大講師が、静岡のクイズ団体「SDQC」に参加し、クイズを通じた地域交流に貢献しつつ、研究プロジェクトの一環としての実験も行いました。

「SDQC」は、静岡県を拠点に、同県のクイズ活動の活性化やクイズを通じた地域交流を目指して活動する団体です（月に1度、静岡市内で例会を開催）。例会では、過去の早押しクイズ大会で出題された問題を出し合ったり、各自が自作のクイズを持ち寄ったりしています。

認知科学研究の経験のみならずクイズプレイヤーの経験も有する白砂講師は、クイズ(早押しクイズ)を題材に、人の思考・判断の背後にある認知プロセスを探る研究も行っています。白砂講師は2025年5月よりSDQCに参加しています。同年6月および9月の例会では、研究プロジェクトの一環として行動実験も実施しました。白砂講師の活動は、「クイズを通じた人々の交流」というSDQCのコンセプトに貢献するほか、一般の学生・社会人に学術研究の一端に触れる機会を提供し、科学と地域の橋渡しの役割も果たすものといえます。

なお今回行われた実験は、先端情報学実習「実世界と数理世界を結ぶモデリングとシミュレーション」のメンバーおよび行動情報学科3年の吉田勇翔さん(狩野研究室所属)による研究プロジェクトの一環です。



静岡のクイズ団体「SDQC」例会の様子



行動実験を行う白砂大講師

白砂大研究室HP: <https://sites.google.com/view/masaru-shirasuna/home?authuser=0>

館山寺の魅力再発見プロジェクト

本プロジェクトでは、浜名湖かんざんじ温泉観光協会と連携して、学生が中心となり、館山寺地域の地域活性化を目的として、2025年1月25日に新名物アイデアソンin館山寺が実施され、その最優秀賞のアイデアがもととなり、「ゆあがり牛乳プリン」が浜松の企業により商品化されました。この商品化の取り組みは中日新聞(2025年7月4日)と静岡新聞(2025年7月7日)に掲載されました。

なお、本プロジェクトは、先端情報学実習「地域資源情報のデジタル化と活用に関する研究」の一環でもあります。

新聞報道：

・2025年7月4日 温泉後に「牛乳プリン」いかが 館山寺の新名物目指し、高校生ら開発、中日BIZナビ、<https://biz.chunichi.co.jp/news/article/10/109662/7/>、(2025年9月26日閲覧)。

・2025年7月7日 浜松・館山寺温泉の新名物が誕生！「ゆあがり牛乳プリン」完成 大学生ら考案、あっさりした風味特徴、静岡新聞DIGITAL Web, <https://news.at-s.com/article/1756692>、(2025年9月26日閲覧)

杉山岳弘研究室のWebページ：

<https://www.sugilab.net/>

写真：販売された「ゆあがり牛乳プリン」



情報技術と英語体験学習 -高校生との研究室体験会報告-

2025年7月25日に高瀬研究室では、静岡県立浜松湖南高校の1年生10名と教員2名を対象に研究室体験を実施しました。本研究室では、仮想現実（VR）をはじめとする最新の情報技術を活用し、コミュニケーションと言語習得の関係を探究しています。

参加者は、VR空間内で協定校に留学したカナダでの様子や大学生が考案したモーションキャプチャーを利用したゲームを通じて最新の技術に触れました。操作方法を学んだ後は、アプリケーションを利用して英語での観光案内や語彙学習に取り組み、学生スタッフのサポートを受けながら、VR空間における言語活動の展開を体感しました。また、VR以外のメディアを用いた研究や、データ分析の方法についても紹介しました。

体験後のアンケートでは、「新しい体験で楽しかった」「非日常的なことを体験できてとても楽しかった」「本当に現実にいるような感覚になり、不思議だった」といった感想が寄せられました。多くの高校生が「初めての体験」「没入感」「非日常性」を強調し、ポジティブな感想を述べており、VR技術を活用した言語学習の可能性に触れる有意義な機会となりました。

この取り組みは、令和7年度「女子中高生を対象に含む研究室体験（静岡大学男女共同参画推進室）」の支援を受けて実施されました。



地域密着型プログラミング講習会「レギオ」

レギオは国際情報オリンピック参加につながる国内予選参加を目指す生徒に対して、プログラミングとアルゴリズムの基礎的・応用的トレーニングを行うための講習会です。本年度は静岡大学情報学部主催・常葉大学経営学部共催で開催しました。

2025年(令和7年)8月4日(月)に入門編、8月22日(金)に初中級編を開講し、講師は静岡大学情報学部より小暮悟教授、山本頼弥講師、常葉大学経営学部より山下浩一教授が担当しました。新型コロナウイルスの影響により2020年度からオンラインでの開催を続けていましたが、今年度は久しぶりの対面開催となりました。浜松工業高等学校、科学技術高等学校、豊橋市立南部中学校、豊橋市立豊城中学校から4日に25名、22日に24名が受講いたしました。

受講後のアンケートには、プログラミングの知識が増えた、関数やアルゴリズムに関する練習・復習ができた、といったコメントがありました。また、もう少し難しい問題にも取り組みたい旨の頼もしいコメントもありました。



講習会中の様子

「浜松市民アカデミー」は浜松市が毎年開催している市民向け講座で、「未来を創る学びの旅」というテーマで、浜松市と周辺の大学から教員を講師として呼び、専門的な内容を含む高度な授業を行うものです。

午後7時開始と遅めの時間帯の授業でしたが、40代～80代の受講生58名が参加し、放射線
のリスクやメリット、社会における放射線の利用法などについて熱心に講義を聞いていまし
た。後半は増澤講師によるダイヤモンド放射線検出器の動作原理の解説など、専門的な研究
の紹介も行われ、受講生は熱心に聞き入っていました。

題目：「ダイヤモンドで放射線を測る?! ～放射線の計測と社会利用～」



「未来を創る学びの旅」
～多様な学びの交差点～

令和7年度・第33回 -

浜松市民アカデミー



受講生募集のお知らせ

「未来を創る学びの旅」
～多様な学びの交差点～

- ・さまざまな情報が行き交う現代社会。それら情報を正しく読み解くことで、自分の生き方に新たな道しるべを発見することができます。
- ・より豊かに、よりスマートに生きていくために新たな知識・知恵を学んでみませんか。「浜松市民アカデミー」では、向学心旺盛なあなたを満足させる全91講座をご用意いたしました。
- ・県立大学8大学9学部の先生方が、専門性を生かし、最新の情報と日常生活で役立つ知識・知恵を分かりやすくお届けします。是非ご受講ください。



回	講義日	講 座 内 容	(会場 浜松市地域情報センター・1階ホール)
①	8/27 (水)	「ダイヤモンドで放射線を測る?! ~放射線の計測と社会利用~」 静岡大学 情報学部 准教授 増澤 智昭 (ますざわ ともあき) 先生	
②	9/3 (水)	「認知症について学んでみませんか?」 聖隷クリストファー大学 看護学部 准教授 木村 暢男 (きむら のぶお) 先生	
③	9/10 (水)	「地域文集掲載の児童作品から見つめた社会 一文集「はままつ」と文集「ひろさき」から」 浜松学院大学 地域共創学部 准教授 小山内 早苗 (おさない さなえ) 先生	
④	9/17 (水)	「音のデジタル信号処理 ~できること・できないこと~」 静岡理工科大学 理工学部 准教授 武岡 成人 (たけおか しげと) 先生	
⑤	9/24 (水)	「優秀な子どもの生活習慣とは?~子や孫に伝えたくなる、ここだけの話~」 静岡産業大学 スポーツ科学部 准教授 徐 広孝 (じょ ひろたか) 先生	
⑥	10/1 (水)	「世界遺産「ヴェネツィア」をめぐる学びの旅 ~歴史と芸術、景観保全の観点から~」 静岡文化芸術大学 文化政策学部 教授 武田 好 (ただた よしみ) 先生	
⑦	10/8 (水)	「最新の幹細胞・発生医学や組織工学の知見から再生医学の進展まで」 浜松医科大学 医学部 教授 佐原 真 (さはら まこと) 先生	
⑧	10/15 (水)	「触媒技術で未来のエネルギーをつくる: 脱炭素社会への第一歩」 静岡大学 工学部 准教授 渡部 綾 (わたなべ りょう) 先生	
⑨	10/22 (水)	「市民目線で DEI (Diversity, Equity, Inclusion) を考える」 常葉大学 健康プロデュース学部 准教授 羽田真 真帆 (はたの まほ) 先生	

24

浜松市立江南中学校の生徒が情報学部を訪問

令和7年9月22日、浜松市立江南中学校の3年生46名が情報学部を訪れました。情報学部の学生によるプログラミング講座では、生徒たちがジャンケンゲームの作成に挑戦。初めてのプログラミング体験に、興味津々の様子でした。講座の後は、キャンパス内の附属図書館分館と高柳記念未来技術創造館を見学。大学の知的資源の奥深さに触れ、学びの世界の広がりを感じました。昼食は学内の食堂で。勉強だけではなく、大学生の生活の雰囲気も味わうことができました。訪問を通じて、中学生の皆さんに大学での学びや研究、そして学生生活に対する関心を深めてもらうことができました。



プログラミング講座でジャンケンゲームを作成している様子



図書館分館と高柳記念未来技術創造館を見学している様子



学生生活も体験

静岡県立川根高校魅力向上支援プロジェクト

静岡県立川根高校では、地域に根ざした学びの深化を目的に、川根本町を題材としたデータ活用型探究学習を実施しました。本事業は高校必修科目「情報」と連動し、静岡大学情報学部永吉研究室と連携して展開したものです。8月に統計資料や住民アンケートなどの定量・定性データを収集し、9月から11月にかけて大学生のフィールドワーク活動支援や講義、討議を通して分析と考察を行いました。12月には地域関係者を招いた成果発表会を開催し、探究の成果を共有しました。本取組により、生徒は地域の現状や課題、魅力への理解を深めるとともに、データに基づき課題を発見し解決策を構想する力を養いました。さらに、地域・大学・行政が協働する教育モデルの構築と、地域の魅力発信にもつながる実践となりました。なお、本活動は、令和7年度しずおか中部連携中枢都市圏地域課題解決事業の助成を受けて実施しました。



大学生・高校生と一緒にブレインストーミング



大学院生による分析結果の報告の様子

ミュージアムDX推進の取組

村野研究室では、静岡県および京都府の博物館および文化施設と連携・協力してミュージアムDXに関する取組を進めています。今年度は浜松市博物館、浜松市楽器博物館、鴨江アートセンター、静岡市立登呂博物館、静岡市歴史博物館、京都府京都文化博物館および京都KYOTO地域文化をつなぐミュージアムプロジェクト実行委員会の中核館等で実施しました。その連携・協力の仕方は様々で、有識者として事業の企画に関わったり、博物館資料のデジタル化の実技を行ったり、市民向け3Dワークショップを実施したりと多様です。このうち浜松市博物館では、莊司研究室と連携して生成AIの活用を検討しました。1月には京都府文化政策室の主催する京都府ミュージアムフォーラム第5回合同研修会で、3月には静岡県博物館協会が主催する令和7年度第3回講習会でも講師をつとめ、成果を紹介しました。ミュージアムDXは世界的関心事で各国・各地の博物館で様々な実践が行われ、国際博物館会議（ICOM）でも重点トピックスの一つとなりました。今後は、ここでの連携事業を世界に発信できるようにしていきます。



「浜松近代の名建築を3D スキャンしよう！ -KAMOE LABO-」の様子

地域在住高齢者の健康チェック会

窪ゼミは地域で生活されている高齢者の健康チェック会に関わっています。健康チェック会は様々な地域で開催されており、地域在住高齢者の健康状態の把握や介護予防の推進に貢献しています。各会場では、身体機能や生活機能に関する測定、聞き取りなどを行い、参加者一人ひとりの健康づくりを支援しています。

また、2026年3月6日に愛知県東海市のしあわせ村で行われた健康チェック会には窪ゼミの学生も参加し、教員の指導のもとで測定補助や参加者への対応などを担当しました。学生にとっては、地域で生活されている高齢者と直接関わる貴重な機会となり、とてもよい経験となったと思います。今後も地域との連携を大切にしながら、健康チェック会を通じて地域貢献に取り組んでいきたいと思っています。



健康チェック会の様子①（左端の人物が窪ゼミの学生）



健康チェック会の様子②

「西浦の田楽」の記録映像アーカイブプロジェクト

本プロジェクトは、浜松市天竜区水窪町西浦の国指定重要無形民俗文化財「西浦の田楽」の記録映像アーカイブを制作して、継承の大切さを伝えることを目的としています。「西浦の田楽」は、静岡県浜松市最北端の天竜区水窪町西浦地区で行われる祭りで、1300年もの間、継承され続け、国指定重要無形民俗文化財（第一号）となっています。現在、急激な過疎化によって継承の危機にさらされています。そこで、本プロジェクトでは、毎年のお祭りの演目を丁寧に記録し、公開できる範囲で、誰もが閲覧できる映像アーカイブサイトとして公開します。これにより、地域外の人々にも「西浦の田楽」の価値と魅力を伝えるとともに、将来的な保存・研究・教育への活用を図ります。

新聞報道：

- ・2026年3月19日 朝刊 「西浦の田楽(浜松)」後世に 静岡大学生ら 映像サイト制作



図：記録映像アーカイブのキャプチャ



図：本番の撮影風景

杉山岳弘研究室のWebページ：

<https://www.sugilab.net/>

特別支援の地域への拡張を目指すインクルーシブ・ナラティブAIプロジェクトの構想（浜北特別支援学校）

行動情報学科森田研究室では、特別支援学校における支援人材の不足や地域参加の停滞といった課題に対し、地域住民や学生の関与を促進する新たな取り組みとして、「インクルーシブ・ナラティブAIプロジェクト」を構想・推進しています。本プロジェクトでは、支援活動の内容や意義を個人に紐づくナラティブ（物語）として再構成し、LINE公式アカウントを通じて発信することで、参加の動機形成を支援するボランティアマッチングシステムの開発を進めています。

現在、浜北特別支援学校とのミーティングを重ねながら、現場のニーズを踏まえた設計の検討を進めており、地域連携の枠組みとして元教育学部教授の岡本康哉氏も参画しています。また、研究室に所属する西村あずきさん（行動情報学科）、京条颯さん（行動情報学科）、研究室OBの長島一真さん（東京大学研究員）を中心とした実証的な運用を通じて、地域における持続可能な支援ネットワークの構築を目指しています。



図: 浜北特別支援学校および開発中のナラティブ生成システム

4. 連携協定の締結

浜松医科大学との部局間包括協定の締結

国立大学法人浜松医科大学と国立大学法人静岡大学浜松キャンパスの3部局（情報学部・工学部・電子工学研究所）は、令和7年11月10日（月）に双方の教育・研究等の機能強化及び事業の発展を目指し、連携・協力するために、それぞれに部局間包括協定を締結いたしました。（情報学部と工学部は浜松医科大学医学部と、電子工学研究所は浜松医科大学光医学総合研究所との協定）



静岡大学では未来創成ビジョンとして9つの目標（※）を定めており、これらの目標のうち、特にG1：ソーシャルウェルネスの実現、G3：イノベーションの創出、及びG4：スマートコミュニティの実現を推進するため、静岡大学浜松キャンパスの3部局（工学部・情報学部・電子工学研究所）はそれぞれ浜松医科大学と包括協定を結び、教育、研究、地域貢献、等様々な活動で密接な連携・協力を図っていくことといたしました。医・工・情報連携ワークショップの開催や、集中講義の共同実施、単位互換、課外活動の交流など、これまでの医・工・情報連携をより深化させ、様々なバックグラウンドを持つ学生が交流することにより多様な視点を持つ学生を育成するとともに、医・工・情報の連携による共同研究を推進し、静岡県、日本、そして世界に貢献することを目指します。

<https://www.shizuoka.ac.jp/cms/files/shizudai/MASTER/0100/g4FCNMxT.pdf>

静岡市・浜松医科大学との「医工情官・地域連携協定」の締結

静岡市と浜松医科大学（医学部・光医学総合研究所）と本学浜松キャンパスの3部局（情報学部・工学部・電子工学研究所）が、令和7年12月12日（金）に「医工情官・地域連携協定」を締結いたしました。

静岡大学が掲げる9つのビジョンにおいて、医・工・情・管の連携によりG1：ソーシャルウェルネスの実現、G3：イノベーションの創出、及びG4：スマートコミュニティの実現を推進し、静岡市の抱える医療、介護及び健康分野の地域課題解決、健康寿命の延伸、地域社会の発展及び研究等の機能強化に向けて、相互に連携・協力して取り組んでまいります。



浜松市・浜松医科大学との包括連携協定の締結

浜松市と浜松医科大学（医学部・光医学総合研究所）と本学浜松キャンパスの3部局（情報学部・工学部・電子工学研究所）が、令和7年12月16日（火）に包括連携協定を締結いたしました。

静岡大学が掲げる9つのビジョンにおいて、医・工・情・管の連携によりG1：ソーシャルウェルネスの実現、G3：イノベーションの創出、及びG4：スマートコミュニティの実現を推進し、大学機能の強化・充実を図るとともに、教育、学術研究、健康・医療・福祉及び産業振興等の各分野において地域社会の発展と人材育成に向けて、相互に連携・協力して取り組んでまいります。



5. 情報学部地域連携科目

コミュニティ・デザイン論/演習

本科目では、人間集団や社会・文化の成立、歴史と深く関わるコミュニティ概念について、社会科学の理論や方法を踏まえて学んでいます。日常に身近でありながら「遠い」存在にもなっている対象や場（災害、家族、地域社会、祭り、市民協働、NPO、職場）を取り上げ、その具体例を通してコミュニティをいかにデザインするかを考えていきます。その中で、地域コミュニティの実態を学ぶためにフィールドワークを行い、コミュニティの今日的課題を把握していきます。特に、浜松市市民協働センターや浜松まつり会館といった学外のフィールドに赴き、調査や観察を通して情報収集を行っています。

情報社会とコミュニティ/情報・コミュニティ演習

情報・コミュニティ論では、情報という観点からコミュニティを考察することにより、近代以降の社会に現れた様々なコミュニティの理解を深めています。講義では、浜松市の外国人コミュニティや静岡県内の災害復興支援活動などを事例としながら、現代における地域課題の発見・分析に取り組んでいます。情報・コミュニティ演習では、地域連携推進室のアイデアソン・データソンと連携しながら、情報・コミュニティ論で扱った地域課題の分析・解決のためにオープンデータをどのように活用できるか（活用すべきか）について、グループワーク形式で考えています。

家族福祉政策論

本科目では、「福祉」概念を深く理解したうえで、生活者の視点からコミュニティをデザインしていくために必要な視角と諸知識を学んでいます。毎回の授業では、児童福祉や高齢者福祉といった地域課題に取り組んできた実務家を講師やゲストとして招き、それぞれの経験に基づいた講義をしていただき、地域の福祉課題について学生に考えてもらっています。

フィールドリサーチ

本科目では、「社会調査法」等で学んだ諸技法を活かして、調査を企画・実施できる力を身につけるとともに、調査対象者（協力者）に対する共感性を養うことを目標にしています。学生は、地域調査を実施し、行政、企業、地域・住民組織、NPO等、さまざまな分野で活躍しておられる地域の方々にインタビューを行っています。近年は防災・災害対策をテーマに、聖隷浜松病院、静岡県浜松土木事務所、浜松市危機管理課等にご協力いただき、調査を実施しました。

博物館実習

博物館学芸員資格取得のための科目であり、博物館資料の収集、保管、調査研究、展示、DXその他博物館学芸員の諸業務を実際に体験することで、理解を深めます。学内実習では、文献、絵画、工芸品等の各種資料を用い、その取り扱い、調査研究等について実習します。

また学内における小展示を企画、実施します。見学実習では、10か所以上の博物館施設等の見学を実施します。また館園実習では、実際に博物館・美術館の現場で1週間近くにわたり実務を経験します。これらを通じて、博物館の仕事と社会貢献について実践的に考えていきます。

情報学特別講義Ⅰ

本科目では、企業、行政、メディアなど、特に地域情報化の現場で生じている現象や課題を知り、それに応えるためにどのような形で情報学を深めるべきかについて理解を深めていきます。そのために、情報化の最前線に対応する企業や自治体で働く方々に、それぞれの現場の実態と課題をお話しいただいています。近年は、静岡県を代表するメディア企業である静岡新聞社・静岡放送(SBS)の方々を講師としてお招きし、メディアの現場における業務の実態や課題について講義していただき、地域メディアの意義と役割についての理解を深めています。

メディア制作演習

メディア制作演習は、表現する面白さと作品制作の難しさを学ぶ演習形式の授業です。映像班と雑誌班、創作班に別れて活動しており、「情報学部紹介CM」の制作や雑誌『浜松ZINE』の出版、木版画を用いたTシャツ作りとSNS発信を行っています。そんなふうにして学生は、自分たちが普段何気なく消費しているメディアコンテンツがどのように生み出されているのか手を動かしながら考え、消費者としてではなく「生産者（送り手）」としてメディアと向き合います。そのなかでも映像班と雑誌班の制作は、地域の方のご協力が不可欠です。2025年度は、映像班は、「地域と歩む情報学」というテーマで天竜浜名湖鉄道社長の松井宜正さん取材したり、「情報学部の未来を切り拓く」というテーマで情報学部教員の藤岡伸明先生にお話を伺ったりしました。雑誌班は「ナイスパスで行く贅沢なひととき」というテーマで日本茶専門店宇布乃園さん取材したり、「徒歩圏外×アルバイト in 三ヶ日」というテーマでJAみっかびさんにお世話になったりしました。アポイントを取り、取材交渉を重ね、出演承諾書を受け取るころまで学生自身が行います。地域の中で学び、地域の中で考える授業運営に、今後ともご協力を賜れば幸いです。



2025年度メディア制作演習成果物



映像班『地域と歩む情報学』のキャプチャ

6. 情報学部教員による地域志向科目（教養科目）

わが街・浜松の市政

全学教育科目の一つであるこの科目では、浜松市の職員を毎回講師に招き、浜松市の現状や課題、市の施策について学んでいきます。都市計画、産業、育児、防災、環境、多文化共生、行財政改革など、様々な分野において現場に携わっている方々の話を聴くことで、私たちの生活に密接に関わる地方行政の実際について理解を深めることができます。

地域社会と情報

全学教育科目の一つであるこの科目では、地域社会における情報の役割について、浜松市の事例を中心に学んでいます。授業では、企業、政府機関、自治体、社会福祉協議会、NPOといった様々な組織で働く専門家をゲストとしてお招きし、地域社会の中で情報がどのように生まれ、機能して、どう社会に役立っているか、また、様々な情報が社会や地域の人々の生活にどのように影響しているかについて講義していただいています。

社会と製造業

本科目では、日本の製造業を対象に「ものづくり」とは何かを考え、製造業に関する基本的な知識を身につけるとともに、学生が卒業後、製造業やその関連産業で活躍できる素養を身につけることを目指します。また、産業革命を含む製造業の歴史的な変遷と現在の産業における位置づけ・役割などを学びます。浜松は地域的に製造業が盛んです。産業史を専門とする大学教員や地元製造業の現場で活躍した本学の卒業生を講師に迎えて開講しています。

起業論

本科目は学際科目の一つで、情報学部と工学部の学生を対象としています。科目名に“起業”とはありますが、実際のところは世の中をより良いものにしようとする姿勢を持ち続けることの重要性を説く科目です。この授業をとおして、身の回りから、地域、国、広くは世界にまで目を向けて、そこに潜む課題を明らかにし、その解決に向けてチャレンジを続ける強い気構えを持ってもらいたいと願っています。